埼玉・元町二丁目遺跡

1　所在地　埼玉県川越市元町二丁目
2　調査期間　第一次調査　一九九六年（平8）六月～一九九七年七月
3　発掘機関　川越市教育委員会
4　調査担当者　田中　信・天ケ嶋岳
5　遺跡の種類　都市跡
6　遺跡の年代　近世、近代
7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

元町二丁目遺跡は武蔵野台地北端に位置する。当地の都市化は、一五世紀中頃、扇谷上杉持朝の命により太田道真・道灌父子が河越城を築いた頃に始まり、後北条氏の時代には市が立ち並ぶ近世都市的な様相を見せはじめる。

江戸時代に入り川越の城下は、寛永一五年（一六三八）の大火で大打撃を受けるが、松平信綱により城と城下の大改造がなされ、現在にいたるまでの都市構造の骨格が完成する。

（川　越）

調査地は、城下町の起点ともいえる札の辻から南の、江戸時代から明治時代にかけて商業の中心として栄えた旧南町の通りの北側に位置する。木簡の出土地点は、明治時代の初めには呉服店を営んでいた、屋号近治こと近江屋の屋敷地の一角にあたる。

木簡が出土したSE五は、一八世紀後半から一九世紀初頭頃までの一辺約二mの方形の廃棄土坑で、通りに面する方から店―屋敷―蔵と続く屋敷割りのその奥に配置されていた。

同じ場所で最低二回の改修がなされており、最後の廃棄土坑は板製の導管によって導かれた生活排水なども流されていたようである。この遺構からは、木簡のほかに、瀬戸・美濃の大型仏花瓶や漆塗りのお面型木製品、鉄製鋸、曲物柄杓、下駄、家紋付漆器、朱漆塗箸なども出土している。

なお本遺跡では、今回紹介する二点以外に、判読不能のものも含め一〇点あまりの木簡が出土している。

8　木簡の釈文・内容

(1)　464×(80)×16　081

・「○ふるひきぬ」
・「○ふるひきぬ」

(2)

・「武州川越南丁　播磨屋
近江屋治兵衛殿　利兵衛」

・「十月十九日　神田
道中安全　富松
町」

230×63×5　011

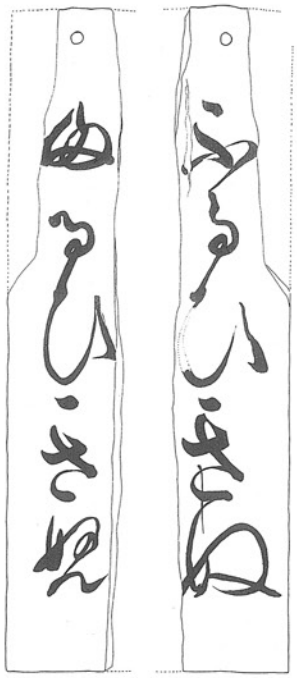
(1)は上部に吊り下げるための穿孔があり、両面とも同じ内容を表記していることから、店内に吊り下げられたディスプレー用の札として使われていたものか。

(2)は木簡が出土した場所で店を営んでいた近江屋治兵衛へ、(江戸)神田富松町(現在の千代田区神田二丁目あたり)の播磨屋利兵衛が荷を送ったときに付けた荷札と考えられる。呉服商近江屋は、古文書などにより嘉永元年(一八四八)から明治三五年(一九〇二)まで当地で店を構えていたことが知られるが、具体的な商取引を示す文書は残っておらず、今回江戸との取引を示す貴重な遺物が発見されたといえる。

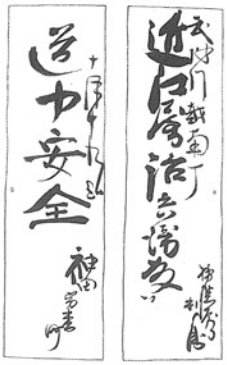
9　関係文献

田中信・天ケ嶋岳「川越城下の町屋」(『江戸と周辺地域』一九九八年)

(田中　信)



(1)



(2)